

指針

No.4 1969 10/17

社共主義青年同盟
三多摩地区委員会

10/10総司令部の陸軍団を

安保粉砕！ 日米打倒！ 秋期六戦へ領導せよ！

大阪中野所創者の烽火を全国へ拡大し、

学園闘争、現実占拠から、権力中枢制圧へ！

10/21全共闘へ反戦武装行動隊を先頭に

非軍事態体制を打ちくだせ！

永続的政治へ！ 社会危機を現出せしめよ！

10/10斗争は、政府・ブルジョアジーの治安政策、既成主義の改変にむかぬが、秋期
派戦を以て抜く全部隊の総動員、反体制一戦隊の編成兵士として斗い抜かれた。

権力はこれに対し「テモ規制」という、前号で述べた治安的対応の強化を打ち出しながら、
政治勢力はならぬ。暴徒、として扱おうと企てたが、政治対応としてこたえなければ対応し
きれぬというジレンマに入りはじめた。そしてブルジョアは、おが同盟をもっとも鮮明に
全戦線に展開したマッセンストライキがついてどの革命性の一掃をひらき出すに至って、その
危険性を敏感に察しとり、日経連を先頭に、山積ストへの対応を本格的に開始した。

社共は、「社共主義」の政治権獲得に専心して反動勢力の台頭を警戒するが、社共党
はシムタリと共産党の依頼して既成五黨体制を維持せんとして「秩序派共闘」をうけ入れ
るをえらぐに努めている。だが一方、社会党・急進は、10/10斗争によって、カハラの反戦解
体・派戦派の組織不可成であり、反体制青年行動隊の編成・展開も派戦不可成であること
を自己認識せざるをえなくなつた。それにより、社共体制への傾斜が一層マラ目に出て、一
日共斗すから十分の地位する条件を失いつつある。

二二斗争は、二二に結集した急進の政治闘争を、国家権力との直接対決の場において表現
し、政治勢力としての新五黨の全力をかき立てた斗争として積極的役割を演じた。また、その
積極性のため、今、急進・軍事同盟は、決定的役割を演じたことになりつつある。今日の
階級斗争の激化が与えている、政治斗争の激化は、軍事同盟の政治性・階級性をあらわかにす
ること、それと並しに軍事同盟主義者は、二二斗争の場面に於いて、政治闘争は右傾化を
開始しつつある。その政治的右傾化は、ヤブの軍事同盟の目的の日本共産主義となるであろう。
十、二二斗争を目前とした今、本号では二二の場を舞台とする二二にしたい。

10/10斗争と 軍事同盟

十、二二斗争の政治闘争については、すでに
にオ一号、オ三号に於て基本論は示してき
た。ゆえにここでは再考、幾何問題、軍事
同盟との関係に於て明らかにしておく。
中央権力闘争・マッセンストライキとして

開かれることを目指す十、二二斗争に於ては、
戦術的見地限り階級政治斗争の主導権を
握るという情況は変らない。そのことは、
階級斗争の派戦派政治に於て必然化してい
ることであつて、表し悪いの向身ではない。
問題はマッセンスト・中央権力闘争の結合と
して昔考された階級の政治的闘争の結合と
して今考された階級の政治的闘争の結合と
の相違点にある。

「正規軍」主義者（中階級、中級派）「ベリ
ラ」主義者（赤軍派）「救世軍政治指導部」
主義者（共済党）等々に分れる。正規軍主義者
は、十、八以降の革命論者として、その革命
の各段階における政治的任務を、
それら軍事の質の階級を決定するものとして、
きめまわす。大衆運動の自然発生に待たず、
水、すなわち超えて来る軍事の位置を規定する
まじとするものにはかならない。かような
かに軍事を語るもの、かような政治の現実を
象の自然発生性にすぎない以上、その軍事の
質は表現の左翼性にもかかわらぬ。軍事の質
においてはその左翼の右翼日和見主義に転落して
いる。

軍事の形態においてこの階級斗争の政治的
成熟をみることはできない。若しこの軍事問題
に関する行法的考察は階級斗争の成熟した階
級形成における軍事の位置を暴力革命の原則
一般なる形態問題に短絡せしめるといふ、自然
発生にハイギする者に共通する方法論は方法
論に由来するものであり、原則は単に原則と
しての存在に、現象対応は階級主義的に自
然成長性に充たれるという結果に帰すること
なのである。

赤軍派における「軍事思想」は一應攻撃型
階級斗争論によつてあり、軍事問題において
攻撃的階級斗争の場を指定する。この構
想は、本来、同盟において攻撃型階級斗争が
論議された、政治斗争とこの構想の問題をコ
ンフレ理論上の媒介とすることによつて形態
論へ移行させたものに他ならない。そこでそ
れを支えるのは革命の対象たる暴力構造、階
級構造を抜きに、革命の心情、
「論理」であり、その表現こそ、かかろうに
おける主体性論—価値論に他ならない。

赤軍派（中階級を目的）においては、後進
解放斗争において、階級斗争の発展—階級
形成が社会階級という組織形態によつてはこ
めが可能となるかの認識が欠落している。農
村共同体とそれを軍事的に統括する国家権力
（軍部）という政治、社会構成はあつては、政
治的ポレタリアートの形成は農村共同体（
生活の場）から切りはなされて、軍隊に組織
されることを通じてのみ形成するるのである。
この指導もまた軍隊として組織された人民を

軍事政治的に指導することとして存在する
こと、解放軍に行ける指導、政治的指導とこ
その組織の批判的形態を成り得るのである。

だが赤軍派主義者においては、ポレタリア
トの形成過程はこれとは全く異にするもの
であつて、資本制生産様式そのものが農村共
同体を解体させ、ポレタリアートを生みだ
す、その生産過程そのものがポレタリアア
トの規律、組織性を育て、社会階級とこの
ポレタリアートを生み出したのである。ポ
レタリアートの劣化傾向への組織化はその
過程を示すものであつた。革命の問題はこれ
を前提として立てられなければならない。社
会階級とこのポレタリアートにおける政
治的成熟こそが問題とされ、軍事の問
題は政治的成熟化過程の結果として登場する
ものである。ドブレが批判するトロッツキ
の武装自衛論がポレタリアートを目的とする
階級を階級主義的に把握したものに他なら
ないことは二重の批判を伴ふものである。一
つには軍事問題を形態主義的、経験主義的に
把握することの誤りであり、二つにはポレ
タリアートにおける軍事問題は武装自衛と等
場したという情況の産物といふことである。

ポレタリアートが擁護が「革命の防衛」といふ
論理を持つて行われたことはトロッツキのロ
シア革命史に詳しく描かれる通りであり、二
つは革命以来、軍ソウエトを主体とするポ
レタリアートの政治権力とこの成熟を前提
とて、実質的に政治権力を獲得した上で、
それを形式的にも完成させるものとしてこの
起り武装自衛が存在したものである。さらに
軍事問題を階級斗争の中心課題となつたのは
これに引きつづく内戦期であつた。赤軍派正
規軍の問題は国家権力を握つてはじめての
防衛であるから、ポレタリアート国家権力の
防衛に正規軍が必然化したのである。

赤軍派（大衆武装行動隊）の問題はポレ
タリアートの政治的成熟度のバロメーターた
りうるが赤軍の問題はそれとは全く別の問題
である。赤軍派をつらぬく軍事の位置は、成
長しつつある政治的ポレタリアートの自己
表現としての武装自衛であつた。以上のこと
からドブレによる武装自衛批判は一般論とこ

からドブレによる武装自衛批判は一般論とこ

大学の枠は大衆的に越えられたことは周知の
ことである。学園斗争の展開の中では以上の
武装自衛とことんまでに斗うことなしには
斗いの進展はありえなかつたのである。

以上の斗争を踏まえる中で、街頭政斗争
も又、権闘を要求されたのである。学園斗争
の外延的展開の中から生まれ起きた。神田カ
ルテラタンに始まる。街頭征伐、街頭バリ
ケード、街頭政斗争において王子斗争にお
ける党派陣営、大衆の関心を激発的、右翼的
に結びつける方向性を内にはらんでいたので
あった。この二つの意味を充分にはあくされ
ることなく新派斗争が大衆の自然発生の動機
に乗って、党派、大衆が混ざると一体化した
斗いとして斗われた。だがこの一律化自衛は
全く自然発生的であつたため、4/28斗争
において軍事的にそれを越えることは出来な
かつたのである。4/28斗争は、政治的意
図に拘しては、我同盟の中央権力斗争の提議
によつて、政治斗争の進展を方向づけること
に成功しその中で反帝統一戦線を大きく前進
させたのであつて、軍事的感から政治
を見ることかできない赤電報の総括は全くの
ポイントはずれといわなくてはならない。だが
軍事向限に限定してみるかぎり、新派斗争に
みられた一団性すら勝ちとれなかつたという
事実があり、軍事的敗北論には、一定の根拠
があるのだ。だがこの解決の方法にありと、
軍事技術の向限を、武闘の内面としてしかと
らえられぬ。唯武闘論者は、武闘のエスカ
レートしか想定せず、軍事技術の向限を、
武闘の内面に還元するアルシヨア軍事思想に
屈服したのである。だが軍事とは政治の一面
であつて、軍事技術とは、防衛と、大衆の協
合形式そのものであり、総合形式の面が向限
とされ得るのである。

4/28斗争における軍事統括も以上の観
念からなされなければならぬ。4/28斗
争においては党派軍団のみならず、全党斗部
隊も又軍団として登場した。だがこれらが全
体として斗いの統一性を作り出しえなかつた
ことに軍事弱体化は主に存在してはいた。

斗いから、新派派乱の二とき、社会派乱の統一
性に根拠をもちうるのとは異なり国家権力中
枢へと迫ろうとする中央権力斗争としての、

4/28斗争においては、意識性統一性以外
にはありえぬのであつて、4/28斗争に
おける権力とは、大衆的対立関係すら都合的
に崩されたのは、指導における統一性の欠落
と進歩的部分と、大衆結合関係に欠ける意識
的指導の欠落に二つあつたのである。二つら
の二つは政治的関係における反帝統一戦線の
結合の未熟によつて、根本的に規定されてい
たのであつて、軍事向限は政治向限として統括
されることを通してはじめて、軍事技術にお
ける向限も又進歩に欠けるのである。

4/28斗争における「叛乱型政治斗争」の
限界性の露呈にも関わらず、二れに全く意
がつかず現状の進展として「叛乱型政治斗争」
を提議した自然成長主義者連合、共産党もある
二れを提議づけているものこそ政治、社会同
時革命論であつた、現在における社会叛乱、
政治斗争における位相のズレに受かかず、か
つ自然発生的社会叛乱の開始に眼をうつすべ
ることによつて、マルクス主義の覚悟性たる
政治革命先行論すら忘れて、大衆派乱のハス
ハ乗り進めまいという努力の自己喪失である。
しむも社会叛乱の大衆的表現としての、自衛
武装においてすら、叛乱型政治斗争の中で大
衆に守られ実行するにすぎないのである。
最後に都市ゲリラ論の、一面性に注目してお
二つ。大衆と無内容に展開せんとした赤電報
リラは、10/10東部戦争の例も空しく全く
の有効性の欠如を大衆に暴露しつたのである。
この二つの理由は、4/28斗争の統括の方法
論的誤まりと、大衆的斗争性の心情の物質化
の脆弱性にあるわけであるが、都市ゲリラ論
がそれなりに、大衆の心情をとりえるのは、
根拠がある。これは社会叛乱と、政治斗争
の位相のズレそのものに基盤を構つたのである。
社会叛乱としての学園斗争において、それ
なりに、自己権力の幻想を大衆的に生み出し
武装自衛を構想する。だが政治斗争における
政治叛乱の心情と、政治的対決案との間には
大きな落差が存在している。現在の政治斗争
における大衆的性情は、社会叛乱の政治的
反跳として存在するのであつて、戦後政治、社
会団体への反逆としての反権力意識として存
在する。だが反権力意識が政治権力獲得へと
発展するのは直線的にはありえないのであつ

4/28斗争においては、意識性統一性以外
にはありえぬのであつて、4/28斗争に
おける権力とは、大衆的対立関係すら都合的
に崩されたのは、指導における統一性の欠落
と進歩的部分と、大衆結合関係に欠ける意識
的指導の欠落に二つあつたのである。二つら
の二つは政治的関係における反帝統一戦線の
結合の未熟によつて、根本的に規定されてい
たのであつて、軍事向限は政治向限として統括
されることを通してはじめて、軍事技術にお
ける向限も又進歩に欠けるのである。

4/28斗争における「叛乱型政治斗争」の
限界性の露呈にも関わらず、二れに全く意
がつかず現状の進展として「叛乱型政治斗争」
を提議した自然成長主義者連合、共産党もある
二れを提議づけているものこそ政治、社会同
時革命論であつた、現在における社会叛乱、
政治斗争における位相のズレに受かかず、か
つ自然発生的社会叛乱の開始に眼をうつすべ
ることによつて、マルクス主義の覚悟性たる
政治革命先行論すら忘れて、大衆派乱のハス
ハ乗り進めまいという努力の自己喪失である。
しむも社会叛乱の大衆的表現としての、自衛
武装においてすら、叛乱型政治斗争の中で大
衆に守られ実行するにすぎないのである。
最後に都市ゲリラ論の、一面性に注目してお
二つ。大衆と無内容に展開せんとした赤電報
リラは、10/10東部戦争の例も空しく全く
の有効性の欠如を大衆に暴露しつたのである。
この二つの理由は、4/28斗争の統括の方法
論的誤まりと、大衆的斗争性の心情の物質化
の脆弱性にあるわけであるが、都市ゲリラ論
がそれなりに、大衆の心情をとりえるのは、
根拠がある。これは社会叛乱と、政治斗争
の位相のズレそのものに基盤を構つたのである。
社会叛乱としての学園斗争において、それ
なりに、自己権力の幻想を大衆的に生み出し
武装自衛を構想する。だが政治斗争における
政治叛乱の心情と、政治的対決案との間には
大きな落差が存在している。現在の政治斗争
における大衆的性情は、社会叛乱の政治的
反跳として存在するのであつて、戦後政治、社
会団体への反逆としての反権力意識として存
在する。だが反権力意識が政治権力獲得へと
発展するのは直線的にはありえないのであつ

4/28斗争においては、意識性統一性以外
にはありえぬのであつて、4/28斗争に
おける権力とは、大衆的対立関係すら都合的
に崩されたのは、指導における統一性の欠落
と進歩的部分と、大衆結合関係に欠ける意識
的指導の欠落に二つあつたのである。二つら
の二つは政治的関係における反帝統一戦線の
結合の未熟によつて、根本的に規定されてい
たのであつて、軍事向限は政治向限として統括
されることを通してはじめて、軍事技術にお
ける向限も又進歩に欠けるのである。

4/28斗争における「叛乱型政治斗争」の
限界性の露呈にも関わらず、二れに全く意
がつかず現状の進展として「叛乱型政治斗争」
を提議した自然成長主義者連合、共産党もある
二れを提議づけているものこそ政治、社会同
時革命論であつた、現在における社会叛乱、
政治斗争における位相のズレに受かかず、か
つ自然発生的社会叛乱の開始に眼をうつすべ
ることによつて、マルクス主義の覚悟性たる
政治革命先行論すら忘れて、大衆派乱のハス
ハ乗り進めまいという努力の自己喪失である。
しむも社会叛乱の大衆的表現としての、自衛
武装においてすら、叛乱型政治斗争の中で大
衆に守られ実行するにすぎないのである。
最後に都市ゲリラ論の、一面性に注目してお
二つ。大衆と無内容に展開せんとした赤電報
リラは、10/10東部戦争の例も空しく全く
の有効性の欠如を大衆に暴露しつたのである。
この二つの理由は、4/28斗争の統括の方法
論的誤まりと、大衆的斗争性の心情の物質化
の脆弱性にあるわけであるが、都市ゲリラ論
がそれなりに、大衆の心情をとりえるのは、
根拠がある。これは社会叛乱と、政治斗争
の位相のズレそのものに基盤を構つたのである。
社会叛乱としての学園斗争において、それ
なりに、自己権力の幻想を大衆的に生み出し
武装自衛を構想する。だが政治斗争における
政治叛乱の心情と、政治的対決案との間には
大きな落差が存在している。現在の政治斗争
における大衆的性情は、社会叛乱の政治的
反跳として存在するのであつて、戦後政治、社
会団体への反逆としての反権力意識として存
在する。だが反権力意識が政治権力獲得へと
発展するのは直線的にはありえないのであつ

4/28斗争においては、意識性統一性以外
にはありえぬのであつて、4/28斗争に
おける権力とは、大衆的対立関係すら都合的
に崩されたのは、指導における統一性の欠落
と進歩的部分と、大衆結合関係に欠ける意識
的指導の欠落に二つあつたのである。二つら
の二つは政治的関係における反帝統一戦線の
結合の未熟によつて、根本的に規定されてい
たのであつて、軍事向限は政治向限として統括
されることを通してはじめて、軍事技術にお
ける向限も又進歩に欠けるのである。

4/28斗争においては、意識性統一性以外
にはありえぬのであつて、4/28斗争に
おける権力とは、大衆的対立関係すら都合的
に崩されたのは、指導における統一性の欠落
と進歩的部分と、大衆結合関係に欠ける意識
的指導の欠落に二つあつたのである。二つら
の二つは政治的関係における反帝統一戦線の
結合の未熟によつて、根本的に規定されてい
たのであつて、軍事向限は政治向限として統括
されることを通してはじめて、軍事技術にお
ける向限も又進歩に欠けるのである。

社会叛乱としての学園斗争においては、それなりに自己権力の幻想を大衆的に生かす、武装自衛を構想させる。だが政治斗争における政治叛乱の心情と政治的解決点との間には大きな落差が存在している。現在の政治斗争における大衆的熱情は、社会叛乱の政治的反映として存在するのであって、戦後政治、社会団体への反応としての反権力意識として存在する。だが反権力意識が、政治権力獲得へと飛躍するのは直接的にはありえないのである。政治叛乱と政治生命の消滅を越えられたのは、大衆が現実的政治関係の中に登場し、政治斗争を通じて権力意志を形成する以外ないのである。だが現在の現実的政治関係においては、大衆は総体として政治過程から排除され、議会的、行政的政治過程が無関係に進行してゐるかの様相を呈している。このことから現実的政治過程の外部に、それから排除されてゐる心情をそのまゝに組織しようとする考案が登場する。後述の政治構造が何にもかかわらず、このよりの大衆社会化状況を背景に感情的ゲリラ、赤軍派が登場するのである。彼らにあっては政治過程からの排除そのものを基礎とするが故に現実的政治過程とは無関係に権力問題を提議でき、また政治形成が語られるのである。革命の問題を政治の問題として考案するといつて正しきにもかかわらず、マルシヤ下級政治の急激な変化を、

ていねいごとが、このよりの政治の把握を生んだものといえる。あらゆる都市ゲリラ論にあっては、その政治的熱情の現実的根拠は存在しても、それが持続しつゝる社会的根拠は全く存在しないのである。われわれは、以上にみられる他党派の諸君のさまざま自然成長性を取り上げてきたがこのことは10・21斗争に向つてつれ、いよいよその自然成長性は、実践的日相見主義として立ち現れきてゐることに注目しなければならぬ。

われわれにとって10・21斗争における戦術問題、軍事問題は、以上の斗力を越えるものとして精定してきた。学園斗争に見られる社会

革命へと進化した政治斗争としての中央権力斗争、マックスストは、戦術的・軍事的にみるならば、全共斗、反戦の大衆を包摂して、自己権力の政治的根拠をつくること、すなわち自らの社会的根拠地を奪還しつつ、そこにおける大衆との結合を通じて、大衆総体を国家権力の政治的斗力への導ひの中心として、方向性を形づくること、問題なのである。すなわち、学園斗争においてはじめて達成した大衆武装・武装自衛の媒介によって4

28斗争においてはじめて街頭政治斗争における大衆武装は成立した。だがこれは全くの軍事指導において自然成長に止められることによつて有効性を発揮しえなかった。10・21街頭斗争は428がはたすべくしてはたしえなかった課題を完遂しなければならぬ。10・21斗争は単なる党派軍団の集合としての街頭斗争ではなくして、全共斗・反戦の武装行動隊（その実体を党派がになう）として大衆行動の政治的・軍事的前線隊と大衆との結合として組織されなければならぬ。しかも428斗争も、あつたつてよくやることに止まらず、社会

反戦との意識的結合を通じて国家権力への向ひのために、マックスストと中央権力斗争への構造的問題意識に要求されなければならぬのである。だがこのよりの10・21斗争の政治的質の階層に全く盲目は諸派は、単に戦術的考慮の名の下に戦術的右翼方針を出しはじめている。中核、ML、四丁口派が学生軍団を新編へ集めるといふ方針の下に右派プロックを形成したしてゐる。これは全共斗からの自派の軍団の召還であり、前述したように、学園斗争の媒介をへて達した階級斗争の質、軍事の質に無理解は後向きの方針であり、実践的にみても、新編ならば神田より大衆の力に逃げ込めるといふ右翼日相見主義の発現に真の根拠をもつたものである。か此らの言葉上の左翼性にもかかわらず、このよりの右翼方針に押し、遏止めを拵ちえなかつたの故、か此らの政治方針そのものの自然発生性によるもので

ある。軍事の問題は、単にやりよいかどうかの問題ではない。前征と大衆の政治的結合の質をいかに高めるかの問題を保証し之ぬ軍事方針などは戦争ゴッコにすぎない。

また10.21をめぐっては共労党中央毒が新橋方針を決定したことに対し、学生組織が反乱を開始している。共労党中央部における「激進型政治斗争」なるものが、階級斗争の質的前進とは無縁な情況を認め、及び連年の市民運動の急迫化の表現でしかなかったことをめぐりにバックにしている。共労党学生組織は、中央本部斗争を可能とする場所への結集を提起して、中央市民派と対立しているものである。

われわれの10.21における軍事的面は、取場・手段を軸とする地域制圧から兵力増への武装デモの水準の構造を大衆を管へてつくり出すことである。この構図は10.21その日のみでつくるのではなく、それ以前からの斗争の中で設定化するものがあるし、10.21に完成されるものでもない。さらにこれらは、現実的敵との軍事関係の中で成立しうることなのである。新宿が、神田かという場所の問題そのものでなく、その場所を指定するにいたった政治判断の質こそが問題とされるのである。当日の軍事判断によってどこか出撃の場所の場所となり、どこか集結・対決の場所となるかに二義的向題である。たがをこにあらわれた進歩の方向性は、それ以後の階級斗争の質を決定的に規定するものとして斬りたる政治的意図斗争が遂行されるわけにはいかない。以上のことからわれわれの当日の軍事組織構造は、当日の政治・軍事

的は戦術に全面的責任をもつ。軍事委員会の下に武装行動隊と特殊工作隊、直ぐキ隊の二系列の所屬するという構成が必ずしも出さる。武装行動隊は戦斗大衆に對する現場における政治軍事的な指導部隊として、大衆の前面に立ち、あるいは直ぐキ隊を行くことによつて大衆的対決状況を作り出す任務を担うことになる。武装行動隊はその質体を党派が担うことによつて、先進的大衆であり、かつ政治的前征であるという二重性をもたざるをえないのである。これに對し党の獨自機能そのものの体现者、組織者としての特殊工作並びに遊撃隊は、全体的政治運轉内からみて全体の

斗いの方向性を保障するために指定された戦術を遂行しうる戦術的、技術的、組織的、政治的かつ党派の活動を貫徹し保たれなければならない。

10.21斗争以後の 斗いの若干の展望

10.21斗争の遂行なくしてその後の展望を一般的に語ることは全く不可能である。10.21斗争がいかにある斗いとして遂行しうるかにそれ以後の斗いの展開はかかっているといつてよい。だが反面それ以後の斗いを展望することによつて10.21斗争もまたその性格を浮きぼりにしうるのだ。そのようは点からそれ以後の斗いのスケジュールと展望を簡単に見ておこう。

10.21斗争が行動隊を軸とした破り、われわれの政治的、運轉的意図を完全に押しとげるならば、佐藤訪米への政治過程の進行そのものにも打撃を与える政治条件が生まれることは可能となり、その後の斗いは、それを現実化しうるか否かから連続的の斗いへと発展する。その中で生かされる社会的危機、政府危機の複合的發展とその中で飛躍的に前進する労働者階級の斗いの波及、etc. このような考察の飛躍の結果から、機動隊の首都制圧下にならぬし、それゆえに全体としては戦術的集約化しつつある新左翼諸派においてそれ以後の展望の喪失により、訪米阻止斗争が統一性のないゲリラとして若干十分に斗えたりするに、全体としてハルシヨア秩序が一時的に登場し、訪米総攻撃への進行するといふ段階の予想にいたるまで、われわれは十分に対応しうる政治性が要求される。そして現実的に予想しうる状況はその中間であるわけであるが、その中で単純に分散的結集を軸とした対決関係を作りださうか否かは、戦術的集団に比べてみれば一見ささるが、戦術的差にすぎないようであるが、政治的にみればむしろ決定的な問題として存在していることを確認しておこう。しかもこのことを理解しえたい種々の自然発生性に原形した軍事技術主義者ばかりは全くの右翼的知識者針を提示して、全運動を急進化したハルシヨア運動への動着させようとしている状況にある。

